徒然草(二)

吉田兼好

つれづれ草　下

第百四十二段

心なしと見ゆる者も、よき一言はいふものなり。ある荒夷の怖ろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「ひとりも持ち侍らず」と答へしかば、「さては、物のあはれは知り給はじ。情けなき御心にぞものし給ふらむと、いと恐ろし。子故にこそ、万のあはれは思ひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、かかるものの心に慈悲ありなむや。孝養の心なき者も、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。

世を捨てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、万にへつらひ、望ふかきを見て、無下に思ひくたすは僻事なり。その人の心になりて思へば、誠に悲しからむ親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗

みもしつべきことなり。されば、盗人をいましめ、ひがごとをのみ罪せむよりは、世の人の饑ゑず寒からぬやうに、世をばおこなはまほしきなり。人恒の産なきときは恒の心なし。人きはまりて盗みす。世をさまらずして凍餒のくるしみあらば、とがの者絶ゆべからず。人をくるしめ、法をかさしめて、それをつみなはむこと、不便のわざなり。

さて、いかがして人を恵むべきとならば、上のおごり費す所をやめ、民をなで、農をすすめば、下に利あらむこと疑ひあるべからず。衣食尋常なるうへにひがごとせむ人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

第百九十段

妻といふものこそ、をのこの持つまじき物なれ。「いつも独りずみにて」など聞くこそ、心にくけれ。「誰がしが聟になりぬ」とも、また「如何なる女を取りするゑて、相住む」など聞きつれば、無下に心おとりせらるるわざなり。ことなることなき女を、よしと思ひさだめてこそひゐたらめと、賤しくもおし

はかられ、よき女ならば、この男をぞ、らうたくして、あが仏とまもりゐたらめ、たとへば、さばかりにこそと覚えぬべし。まして家のうちをおこなひをさめたる女、いと口をし。子など出できて、かしづき愛したる、心うし。男なくなりて後、尼になりて年よりたるありさま、なき跡まであさまし。

いかなる女なりとも、明暮そひ見むには、いと心づきなく、にくかりなむ。女のためも半空にこそならめ。よそながら、時々通ひすまむこそ、年月をへても絶へぬなからひともならめ。あからさまにきて、とまりゐなどせむは、めづらしかりぬべし。

第二百十七段

或る大福長者のいはく、「人は万をさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。まづしくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかむと思はば、すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心といふは他のことにあらず。人間常住の思ひに住して、かりにも無常を観ずることなかれ。これ第一の用心なり。次に、万事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に随ひて志を遂げむと思はば、百万の銭ありとい

ふとも、暫くも住すべからず。所願はやむ時なし。財はつくる期あり。限りある財をもちて、かぎりなき願ひにしたがふこと、得べからず。所願、心にきざすことあらば、我をほろぼすべき悪念来たれりと、かたくつつしみ恐れて、小要をもなすべからず。次に、銭を奴のごとくしてつかひ用ゐる物と知らば、ながく貧苦をまぬかるべからず。君のごとく神のごとくおそれたふとみて、したがへ用ゐることなかれ。次に、恥にのぞむといふとも、怒りうらむることなかれ。次に、正直にして約をかたくすべし。この義をまぼりて利をもとめむ人は、富の来ること、火のかわけるにつき、水のくだれるにしたがふがごとくなるべし。銭つもりてつきざる時は、宴飲声色をことともせず、居所をかざらず、所願を成せざれども、心とこしなへにやすくたのし」と申しき。

抑、人は、所願を成ぜむがために財を求む。銭を財とすることは、願ひをかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、銭あれども用ゐざらむは、全く貧者とおなじ。何をか楽びとせむ。このおきては、ただ人間の望をたちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲を成じてたのしびとせむよりは、しかじ、財なからむには。癰疽をやむ者、水に洗ひてたのしびとせむよりは、やまざ

らむにはしかじ。ここにいたりては、貧富(ひんぷ)わく所なし。究竟(くきやう)は理即(りそく)にひとし。

大欲(たいよく)は無欲(むよく)に似たり。